

野菜

朝9時頃までに作業を行うのが効果的です。



営農部指導課 中江 智子

スイカの人工授粉

スイカは雌花と雄花が別々に咲くので、着果を確実にするために人工授粉を行います。晴天日に気温が上がりはじめ朝9時頃までに作業を行うのが花粉の活力が高く効果的です。

着果節位は15節以上とし、それより低節位の雌花は取り除きます。当日に開花した雄花の花弁を取り除き、葯をむき出しにして花粉を雌花の柱

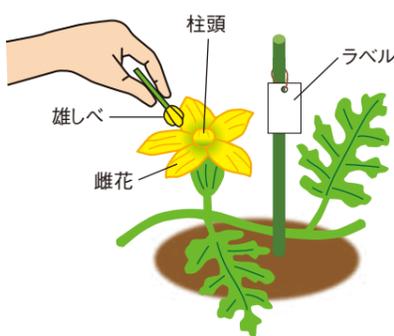
頭に軽くなすりつけます(図1)。雌花は花の下に丸い膨らみがあり、雄花には無いのでよく分かります(図2)。人工授粉を行った日が分かるようにラベルをつけておくと、収穫日決定の目安となります。

授粉から収穫までのおおよその日数は、品種による差はありますが大玉種が約45日、小玉種が約35日です。果実は4本仕立ての各つるに1果つけて肥大させます。

追肥

果実の肥大を目的として追肥を行います。標準的な生育の場合10平方メートルあたり化成肥料を着果時に窒素成分で約80

図1 人工授粉

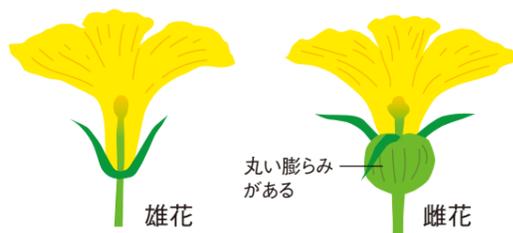


g(窒素成分10%の野菜いちばんの場合800g)、果実が茶碗大になった時に窒素成分で約40g(野菜いちばんの場合400g)施します。

病害虫防除

これからの時期に気をつけた病気はつる枯病や炭疽病です。梅雨時に雨が多いと発生しやすく、空気伝染のほかに水の飛沫とともに飛散して伝染します。炭疽病の症状は葉と茎にあらわれ、黒褐色の病斑を生じ、降雨が続くと鮭肉色の粘着物を生じます。防除は発病初期に重点をおきます。

図2 雌花と雄花の見分け方



花き

2〜3年に1回は植え替えを!



営農部指導課 坂本 理恵

ハナショウブの植え替え

梅雨の庭を飾ったハナショウブは、開花後すぐの6月下旬から7月上旬に株分けして植え替えます。真夏の植え替えは避けましょう。2〜3年に1回は植え替えないと花が咲きにくくなります。花言葉は「うれしい知らせ」「優雅」「心意気」で、気品がある花の姿、たおやかな花弁から想像できますね。

用土

水はけがよく、通気性のよい土が適しています。庭植えの場合は植え場所に腐葉土を1平方メートルあたり15gほど投入し、深さ40cmくらいまで耕しておきます。鉢植えの場合は赤玉土6、腐葉土4の割合で

混ぜた土を使用しましょう。

株分け・植え替え

株分けの際、葉を3分の1くらいに切り詰めると倒れにくく、過度な蒸散を防ぎ活着がよくなります。

庭植えの場合は、掘り上げた株の根を水で洗い、ナイフで2〜3芽ずつに切り分け、10cm間隔で浅く植えます。

鉢植えの場合は、1芽ずつ切り分け、18cm鉢に2芽を地下茎の切り口を向かい合わせにして浅植えします(図3)。

灌水・施肥

乾燥しないよう、土の表面が半乾きになってきたら灌水をします。冬は灌水の回数を減らして多少乾かし気味にします。

基肥は施しませんが、9月の涼しくなってきた頃と春の芽だし時に緩効性肥料(花専用2号や野菜いちばん等)を軽くばら撒く程度施します。

日当たり・栽培場所

土の乾燥は生育を抑えますので、日当たりの良過ぎる場所での栽培は避けます。特に4〜9月の生育期には風通しにより明るい日陰で育てるようにします。

手入れのポイント

開花後に花がらを付けたま

図3 ハナショウブの鉢植え

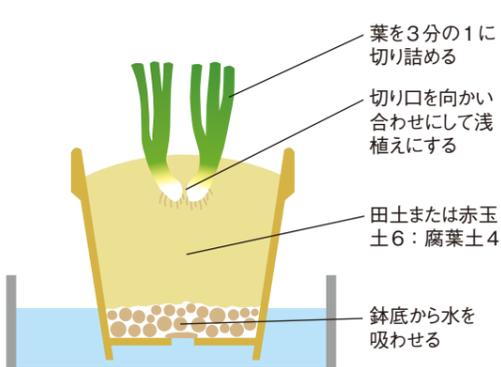
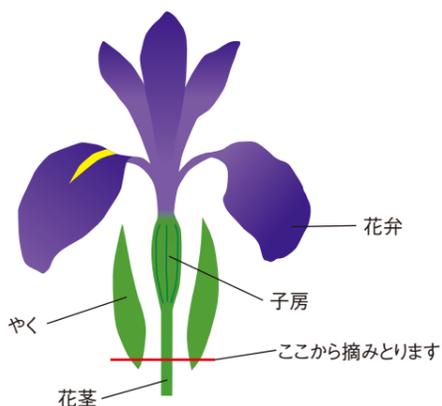


図4 花がらの摘除



ハダニは葉裏に群がって生息し、養分を吸収します。葉がすすれたようになっていたり、黄色くなって落葉したりする場合はハダニが発生している可能性があります。そのほかにも疫病、褐色腐敗病、アブラムシ、オオタバコガ、ウリハムシなどに注意が必要です(表1)。

表1 スイカの防除薬剤一覧

薬剤名	適用病害虫名	希釈倍数	使用時期(収穫〇〇日前まで)	使用回数
アミスター20フロアブル	炭疽病 つる枯病	2,000倍	前日	4回
ダコニール1000	炭疽病 つる枯病	700倍	3日前	5回
リドミルゴールドMZ	褐色腐敗病	1,000倍	7日前	3回
コテツフロアブル	ハダニ類 オオタバコガ	2,000倍	前日	2回
マラソン乳剤	アブラムシ類	2,000倍	前日	6回
	ハダニ類 ウリハムシ	~3,000倍 1,000倍		
モスピラン顆粒水溶剤	アザミウマ類 アブラムシ類 ウリハムシ	4,000倍	3日前	3回

まにしておく種子ができてしまい、栄養がとられてしまうので花がらは子房ごと完全に摘み取りましょう(図4)。花が終わった後は、葉だけになります。光合成をして養分を蓄えるので、植え替えまでは元気のいい緑色の葉は切り取りません。